掟　な　き　道

昭和46年4月20日発行© 限定1000部 定価900円

訳者紹介

深田 甫（ふかだはじめ）

一九三四年千葉県生まれ。慶応義塾大学大学院修了。現在、慶応義塾大学助教授、東海大学講師。

著書＝詩集〈沼での仮象〉。〈ドイツ現代詩研究〉。訳書＝W・シュミーレ〈ヘンリー・ミラー〉。U・ゾンネマン〈革命と不服従のテーゼ〉、カール・クラウス〈文学と虚偽〉。ほかエッセイ、詩。

著者　グレアム・グリーン

訳者　深田　甫

発行者　土屋邦子

印刷　有限会社荘司印刷所

製本　有限会社イマヰ製本所

発行所　㈱創土社

東京都文京区水道一ノ一〇ノ一

振替　東京　四八六六一

TEL（八一一二）五四九二

落丁・乱丁本はおとりかえします

グレアム・グリーン

掟なき道

深田 甫訳

創土社

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

プロローグ……11
1　アナーキストたち
2　信仰
3

第一章　国境……25
河をこえて／一代記／サン・アントニオ／カトリックの活動／見せもの／ラレド

第二章　反乱の国……45
善良なる老人／モンテレイ／サン・ルイス・ポトシ／日曜日の昼食／闘鶏／地下墓地めぐり／哲学者／将軍家での一日／メキシコ・シティへ

第三章　メキシコ・シティでの覚え書……92
解剖／計画／映画館／みんな一緒に少年に／修道女の赤ん坊／フレスコ壁画／〝幼な児らを許せ〟／夜、たのしかったこと／日曜日／黄金狂ではない／旧友／クック・ツァー／メキシコの司教／一九九七年／グァダルーペ

第四章　海岸にむかって……137
坂をくだる旅／オリサバ／聖徒祭の夜／おまつりのあくる朝／ベラクルスへ

第五章　暗がり航路……151
〝おなじぐらいスポーツマンで……〟／メキシコ湾／フロンテラ／河
第六章　神なき邦……173
ガリドの首府／美しき都会の一日／ヴィクトリア朝の冒険家／タバスコの日曜日／ある歯科医の生活／メキシコのトロロプ
第七章　チァパスにはいる……204
サルト・デ・アグア／騾馬の長旅／遺跡を訪ねて／楽園の光景／平原での夜
第八章　チァパスの村……232
流寓の地／悲しきかな、トロイは！／ミス・ボーエンと鼠／集団洗礼／神聖ならざる誕生／閉所恐怖症／雨
第九章　山をこえてラス・カサスに……256
〝行く道の幸運だけ〟／極寒の夜／十字架の森／隠れていた都市
第十章　聖週間……272
ラス・カサスの初見／ミサの家／政治／聖木曜日／ユダの兄弟／二百四十二名のシシィ／

受難日／サン・ミグェリート／フェリア・デ・プリマベラ／奇跡をもとめて／チァパスの最後

第十一章　都会への帰還……307

メキシコの飛行士／オアハカ／ミトラ／汽車の旅／プエブラ／隠れた修道院／ふたたび戻って／むかしの絆／美術工芸／なべて静寂／さようなら

エピローグ……340

1　盲目的な眼／大西洋／現実逃避主義者／エトセトラ

2　心の状態

あとがき／中田耕治……357

函・表紙カット／高橋　清

掟なき道

何が変化をもたらしたのか？　丘や塔は
　立つべき姿以外の姿をとり
そして恐怖もなく　掟なき道は
　国土くまなくよこしまにへめぐる

エドウィン・ミュア

人は大地にさも似たり。髪は萠えいずる草
血脈は河、心臓は巌のごとし

理性の気ばらし（一六四〇年）

世界を、その距離や空間に於いて、そのさまざまなる歴史、さまざまなる人種、その人種の発生、運命、相互の疎隔、闘いに於いて、つづいて、さまざまな方法、習慣、行政、さまざまな畏敬の形式、さらに、企業、目的のない道程、行きあたりばったりの仕事や要求、永続する事実

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に対する無気力な結論、支配のための陰謀の、ひどく脆く、しかも使いものにならないしるし、大きな権力あるいは真実であるとされるものの盲目的な進化、まるで理屈にもあわない要因からでてきたかのように究極的大目的へとはむかっていない種々さまざまな事柄の進展、人間の偉大、あるいは卑小、はるかに隔たって近づきがたい目標、短い生命、彼の未来にかかっているカーテン、人生への絶望、善の敗退、悪の勝利、肉体的苦痛、精神的苦悶、原罪の蔓延と激化、充満していく偶像崇拝、堕落、おそろしい救いがたい信仰喪失、人種すべてを通じてのこうした状況は、きわめておそろしいものだが使徒のことばにいみじくも描かれているような「望みなく、この世に神なく在れば」という状態、こうしたことを考えてわせてみると——すべてこうした事は眼がくらむようなゾッとする光景である。そしていずれもが人間の精神に底ぶかい不可解さをうえつけるが、こういう神秘めいたものは、人間の解決力をだんぜん超えるものである。

この胸をえぐるような、理性を困惑させる事実について何を語るべきか？　たったひとつ私に答えられることがあるとすれば、創造主なる神はおわさぬとするか、もしくは、人間の生きている社会は、真の意味で、神のみそなわし給うところから見棄てられている、としか答えられぬ。……もし神ありとせば、まさに神が存在するがゆえに、人類は、あるおそろしい原初の災厄にまきこまれているのである。

ニューマン枢機卿

プロローグ

1　アナーキストたち

あのころ、ぼくはどうやら十三歳ぐらいであったろうか。そのくらいの年でなければ、あんなところに――ひとにかくれて――暗くなったクロウケイ（戸外でおこなう球戯の一種）用の芝生にいたりはしなかったはずだ。背中の方に兎が動いている音がきこえ、そいつは小屋のなかで草をもぐもぐやっていた。そこの芝生に接してとてつもなく大きな建物がたっていた。ちいさな窓がならんで、どちらかといえばキーブル・カレッジのようにみえた。それは大学で、その建物の背後のどこからともなく、中庭のむこうの方から、かすかな音楽がひびいてきた。土曜の夕方で、学校のオーケストラがメンデルスゾーンを演奏しているところであった。ぼくはひとりきりで暗がりにいて、悲

しみまじりの幸福感にひたっていたのである。（グリーンは、バーカムステッドという小さな町に生れた。父親はここのパブリック・スクールの校長で、学校と校長宅とは隣りあっていて、グリーンは規則どおり寄宿舎に入れられていた）

ちょうどこのあたりで、いわば国と国とが接していたのであった。クロウケイの芝生のところから、木苺の茎のところから、温室やテニス用の芝地のところから、けばけばしい色の煉瓦づくりの大きな方形のヴィクトリア風な建物がいくつか――あたりを睥睨しているのが――いつも眼にはいってくるのであった。どの建物もまるで摩天楼のように、果物の樹木がはえ、兎たちがもぐもぐやっているせまい緑の地帯を見おろしていた。一歩々々こころして歩かねばならなかった。というのも、いまいる砂利の小道のすぐわきが国境線であったからだ。母の寝室の窓からは――この部屋で母は末の子を、学校のざわめきや授業の鐘の音がとりまくなかに、産みおとしたのであったが――まっすぐに校庭が見おろせ、その敷地には講堂とか礼拝堂とか教室とかが建っているのであった。父の書斎のわきの廊下にある荒織りの毛織物をはった緑の扉をおしのけてあけると、うっかりまちがってしまうほどそっくりな、もうひとつ別の廊下にでるのであったが、そっくりとはいうものの、そこはもうよその土地のうえなのであった。そのあたりにいると、婦長さんの部屋からはヨードチンキの、着替え室からはむしタオルの、いたるところからインクのかすかなにおいがときには漂ってきた。背なかにしている扉をもう一度しめると、そのあたりの世界のにおいはかわって、書籍だの、果物だの、オーデコロンだのになるのであった。

ここでは二つの国の住民であった。土曜日や日曜日の午後になると、その毛織物の扉の一方の住民となり、一週間のうちののこりの日にはもう一方の住民となった。境界のうえに暮らしていて、そわそわしないでいられるなどということがありうるだろうか、そんなことが可能だろうか。憎しみと愛という、あいことなった絆で、ひきさかれてしまうのだ。というのも、憎しみは

まったく力づよい絆も同然で、こうとなったら背くわけにはいかない関係を強要するのである。摩天楼とか、石の階段、朝はやくから鳴りひびく割れ鐘の音などからなりたっている土地にいると、恐怖や憎悪というものにさとくなり、一種の掟のない状態に気づくのであって――こころ脅す惨酷さが、反省されるいとまもなく、じっさいに行われうるのであり、こういうところでまず最初にでくわす相手というのは、大人にしても青年にしても、みずからのまわりに正真正銘の悪なる素質をおびた連中であった。コリファクスがいた。かれはコンパスで拷問してきた。こわもてのする三重の顎をもったミスター・クランドンはよごれたガウンを着ていて、悪魔にとりつかれた好色漢さながらであった。こうした高みから悪がパーロウの方にしのびよってきて、パーロウの机ときたら、こまごましたくだらない写真――芸術写真とやらいうやつの広告などでいっぱいであった。かれらが子供の時分にはあたりに地獄がちらばっていたのである。

そこには、ぞっとさせるものと魅惑するものとがちらばっていたのだ。人目をのがれて逃げだせば、たてつづけに一時間は隠れていたもので、辺境の監視者たちに見つからないようにして、ためらいながらも国境線の反対側に立っていたりした――メンデルスゾーンをきいていたはずのものが、クロウケイの球をうちこむ弓形のフープのあたりで、がさがさと兎がでてくるもの音に耳をかしていたりしていたわけで、それは解放された一時間であり――そしてまた祈りのひとときでもあった。一種のいいしれぬ強さで神というものを意識するようになった――時間が一時停止されたまま宙吊りになり――音楽が空中を流れていた。その国境線をこえて雑沓の仲間いりをせざるをえなくなるまえに、なにかが起こってくれそうでもあった。どこにも、こうでなくてはならぬといった必然性などありはしなくて……信仰は山をもゆるがすにたるほど大きかった……大きな建物は暗がりのなかでゆらいでいた。

このようにして、信仰は手もとに到達してきたのだ――形もととのわぬまま、教義ぬきで、クロウケイの芝生のうえに存在するものとして、道のむこうがわの暴力、残酷、罪悪とつながりをもつなにものかとして。地獄のあることが信じられたから、天国のあることを信じはじめるのであった。しかし、かなりのあいだは、地獄の方がなんとなく身近に心にえがけるのであった――だれひとりいっせいに静かにしていることなどない寄宿舎の松やにだらけの板壁、鍵のない便所、〈囚人そのおそろしき獄舎に累々とひしめくは、あまた地獄の亡者あればなり〉、郊外の道を歩くふたりづれ、いつなんどきでも、いずこにいっても、孤独などということはない。英国国教会などではとても、これほどしたしみやすい天国の象徴をあてがうことはできまい。あてがってくれたのは、ただ青銅の鷲のしるし、有志の寄付によるパイプオルガン、〈神よ、恵みをわれらにそそぎたまえ〉、仕事をもたずにすむ静かなクロウケイの芝生、兎、かなたからきこえる音楽ぐらいのものだ。

こういうのがまず最初のシンボルであった。時がたつにつれ、人生のなりゆきでそれらはかわっていった。中部地方の都会では、冬など、寒い電車にのってゴシック・ホテルをとおりこし、一流の映画館や、夜なかにはたらいているすすけた新聞社のそばをすぎ、ひとりでぐるぐる往ったりきたりしている蒼白い肌におしろいをぬりたくった売春婦をわきめに見てゆくうちに、しだいしだい、苦しみながら、しぶしぶ、天国に住みつきはじめるのであった。聖母マリアが青銅の鷲のかわりになってくる。すると、すさんだ世界――ダールの主任司祭は一地方の不純をいっさい認めたし、ペギーは地獄の亡者のために神に挑戦した。――そういう世界をつきすすんでいく愛のぞっとする神秘についてぼんやりした考えをだきはじめるのであった。悲惨、暴力、害悪などを連想するもの、〈あらゆる苦悶や苦痛〉とリルケが書いているものを連想させたが、〈そう

した苦しみは断頭台のうえにみられるようなもの、拷問室のなか、精神病院、手術階段教室、晩秋の橋げたのしたなどにみられるもの〉であった。

橋げたといえば、おおきな金属の橋をおもいだすが、故郷の停車場のそばにあったもので、頑丈そうであった。それでいて、列車が頭上を通りすぎると、その敷げたは共鳴していつまでもゆれた。子守りの女たちが車に子どもをのせて、さびれた城跡、オランダからしの畑のわきをぬけて、公有地の方に押していき、その土地の領主が一世代ものあいだ使わないままとざされた私道の入りぐちのわきを通っていった。そこは掟のない土地であり——あのころでさえ、ぼくはおぼろげにそう感じていたのだが、だれだってほんとうは他人に対して責任などとっていない。チョーサーが建造にあたって力をかしたという城の壁がごくわずかだけのこっていた。その領主の館はつぎつぎ政治家たちに売りわたされてきたものだった。堀割のかたわらに養育院があって、かしいだ小さな建物ばかりだったのをおぼえているが、ひとりの男がたけり狂って、そのうちのひとつに駈けこんでいったのもおもいだす——ぼくは保母といっしょだった——その男はなにか知らないがなにかに腹をたてているようであった。隣人たちから逃れることができるなら、かれはナイフで咽喉をかき切ることだってしただろう。〈世にありて、望みなく、神なきものなればなり〉

つい最近ぼくはその小さな町にもどってみた——日曜日の夕方で、鐘がたてつづけに鳴っていた。若者たちが小人数の群れをなして車のあかりにまぎれてうろついていて、暗くなりはじめたそのあたりで、裏手の戸口からアイルランド系の若い女中たちがひょいとでてきたりした。かれらは〈ローマカトリック教徒〉だったが、なまいきで、司祭にたいしても不作法であった。谷の上手には赤煉瓦の別荘が建ちならぶ通りがあって、そのうちのひとつの通りにはちいさくて新しすぎるカトリック教会が建っていたが、その教会からはなれた国道あたりで司祭に出会ったりす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com